

ふくし“きらり人”

題字：清水 美由希



しみず みゆき
清水美由希さん

社会福祉法人木犀会 ひまわり館・ひまわりキッズ館（笠間市）

社会福祉法人木犀会の「ひまわり館・ひまわりキッズ館」で働く清水美由希さん。今回は子供の頃、介護士の働く姿を見て福祉の道を志し、現在、日々笑顔で利用者様と関わっている清水さんにお話をお伺いしました。

輝いていた介護士の記憶

「小学生のころ、祖父を介護していた介護士の方の働く姿を見て、『介護の仕事』に魅力を感じました」と語るのは、社会福祉法人木犀会「ひまわり館・ひまわりキッズ館」で主任生活支援員として働く清水美由希さん。この時思い描いた夢を叶えるべく、その後、福祉学科のある大学に進学し、小学生から大学生まで続けてきた柔道と両立しながら、実習やボランティアを重ねたといいます。

「大学時代は、高齢者と知的障がい者の施設に実習に行きましたが、知的障がい者の方は感情が豊かで皆さん素直だと実習を通して実感しました。自分がコミュニケーションをとった分、それに応えてくれますし、支援を通して自分も障がい者の方もスキルアップできると思い、障がい者施設への就職を決意しました」（清水さん）

また、大学時代に福島県で東日本大震災の復興ボランティアに参加した経験もあり、『人の役に立ちたい』という気持ちがより一層強くなったそうです。そして卒業後に現在の「ひまわり館・ひまわりキッズ館」に就職し、今では18歳から65歳までの身体、知的、精神、高次脳機能障がいの方を対象に、自立に向けた支援を行っています。とはいえ、仕事をはじめた当初はすべてが順風満帆ではなかったといいます。

福祉とは相手のサインに気づき、 笑顔で関われるかが重要

現場で経験した支援の難しさとは？

「利用者様と関わりをもつようになるにつれて、利用者様がいかに安全に毎日を過ごせるかという危機管理能力の大切さやチームワークできちんと利用者様一人ひとりに合ったプランを作成して支援を行う重要性など、『支援の難しさ』に直面しました。ときには、『自分の接し方が間違っているのではないか……』と自問自答するときもありました。とにかくあのころは日々勉強を重ねる毎日でしたね」(清水さん)

就職をして3年が経ったころ、ようやく仕事にも慣れてきたそうです。

「支援はひとりで行うものではないと実感しましたね。利用者様はもちろんですが、ほかのスタッフをはじめ、保護者様や協力施設のスタッフの方と密に連携を取ることが重要だと思っています。また利用者様が言葉でうまく説明するのが難しく困っているときに、その気持ちを理解して支えになれるよう利用者様の立場になって考え、行動するように心がけていますね。ときには利用者様と接するなかで、介助時の体の動かし方は小学生から続けてきた『柔道』の知識と経験が役立つこともあります！」(清水さん)

福祉の仕事のやりがいとは？

「自分から積極的にコミュニケーションをとり、とにかく利用者様と関わりを持つことで利用者様は必

ずそれに応えてくれます。支援を通して利用者様が今まで出来なかったことが出来るようになって喜んでくれたときがこの仕事の醍醐味だと思います。ときには言葉では伝わらないこともあります。そんなときに私がもっとも大切にしているのは『笑顔』。中途半端な支援では利用者様に見抜かれると思いますし、笑顔で一人ひとりに向き合い、利用者様と楽しみや悩みを共有・共感して、よりよい支援を目指しています」(清水さん)

最後に福祉の道を目指している方にメッセージを頂きました。

「福祉の道に進もうか悩んでいる方も多いと思いますが、『やってみよう！』という気持ちを大切にしていっ歩踏み出してほしいと思います。また、学校の授業で習う基礎知識も重要だと思います。基礎をきちんと学び、その上で向上心を持って、現場で利用者様と一緒に成長していくのが理想ではないでしょうか。私も利用者様がいま以上に不安なく毎日楽しく過ごせるように自閉症スペクトラム(ASD)について勉強していきたいと思っています！」(清水さん)

「介護士になりたい！」という幼い時に思い描いた夢の実現に向けて、一歩一歩その階段を着実に上ってきた清水さん。利用者様と職員という垣根を越えて、人と人との関わり合いを大切にするその姿は誰よりも輝いていました。

